

# 食物アレルギーの診断において より適切に特異的 IgE 検査を使用するために

## 食物アレルギーの管理・治療<sup>1)</sup>

食物アレルギーの管理・治療では「**正しい診断に基づいた必要最小限の原因食物の除去**」が原則です。では、必要最小限の除去とは…、

### 1) 食べると症状が誘発される食物だけを除去する

“念のため”“心配だから”といって、必要以上に除去する食物を増やさない。

検査から原因と疑われ除去している場合は、必要に応じて食物経口負荷試験(以下、OFC)で診断を確定する。

### 2) 原因食物でも、症状が誘発されない“食べられる範囲”までは食べることができる

## 食物アレルギーの診断<sup>2)</sup>

食物アレルギーの診断は以下 2 点を証明することで確定します。

- ① 特定の食物により症状が誘発されること(問診による誘発症状の病歴・OFC)
- ② それが特異的 IgE などの免疫学的機序を介する可能性があること

### 即時型食物アレルギーの専門医紹介のタイミング

- 1) 原因食物の診断が難しい場合や原因不明のアナフィラキシーを繰り返す場合
- 2) 栄養食事指導が必要な場合
- 3) 自施設で OFC の実施が困難な場合

(食物アレルギーの診療の手引き 2020 より抜粋)



監修

伊藤 浩明 先生

あいち小児保健医療総合センター  
センター長

#### 参考文献

- 1) 食物アレルギーの診療の手引き 2020
- 2) 食物アレルギー診療ガイドライン 2021
- 3) 医学と薬学 71 (7) 1245-1252, 2014

## 食物アレルギー診断のフローチャート (即時型症状)

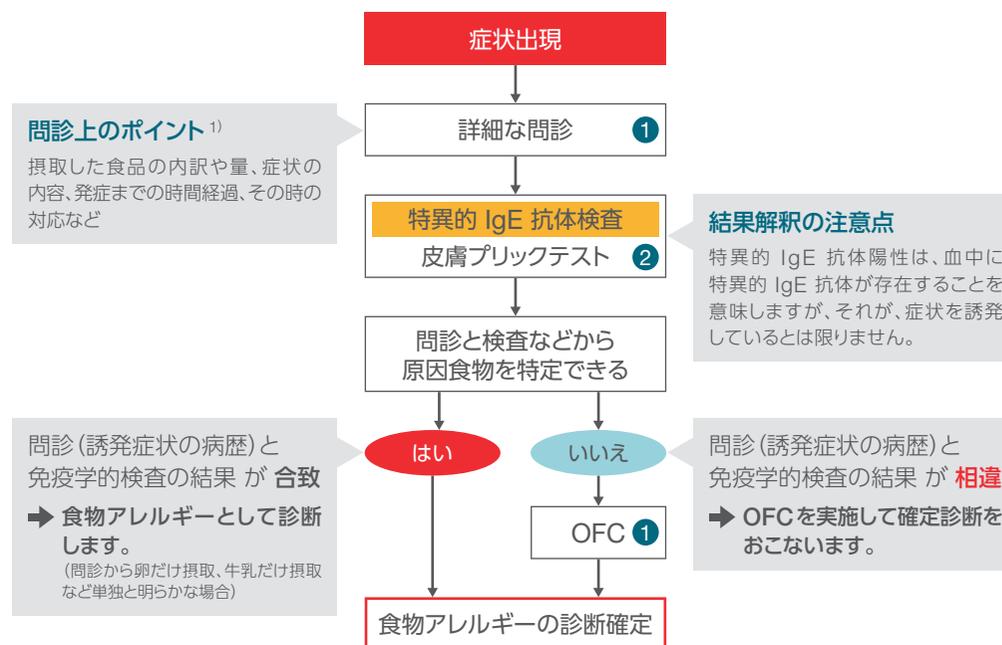


図 1 食物アレルギー診断のフローチャート(即時型症状)

(食物アレルギーの診療の手引き 2020 より一部改変)

# 専門医に聞く:加工食品の原因食物診断のポイント～問診・検査項目の選択・食物経口負荷試験(OFC)～

## 2歳児:カステラを食べて蕁麻疹を発症

問診	検査項目の選択と結果の解釈	OFCの検討	OFC結果と食事指導
<ul style="list-style-type: none"> <li>発症までの経過時間</li> <li>食べたものの食品表示を確認</li> <li>普段症状なく摂取している食品を確認</li> </ul> <p>摂取から30分以内に発症 カステラ原材料:卵・ミルク・小麦 うどんは摂取している 乳製品と卵製品は自発的に摂取を避けている</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>小麦(うどん)は日常的に摂取しているため、検査不要</li> <li>卵・牛乳関連項目を検査</li> </ul> <p>(特異的IgE検査結果)(U/mL)</p> <p>ミルク クラス2 (1.2) 卵白 クラス4 (21.5) オボムコイド クラス3 (10.0)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>OFCの適用とリスクを推定し、自施設で実施するかどうか判断する</li> </ul> <p>ミルク:摂取可否確認のためOFC実施を検討 卵:症状誘発とIgE検査結果から、アレルギーの診断は確定的だが、「安全摂取量決定」のOFCは可能</p>	<p><b>卵アレルギーだが、完全除去は回避</b></p> <p>ミルク:自施設で牛乳1+2mL OFC陰性 →少量摂取を許可 (紹介先に増量の指導を依頼する) 卵:紹介先でゆで卵白0.5+1.0g OFC陰性 →1.0gから摂取開始</p>

### Point

- “うどん”や“たまごボーロ”のように同じ原材料を使った別の食品摂取歴を確認しましょう。
- 患者さんの訴えだけで原因を絞り込まない様に注意しましょう。(「乳製品は与えていない」など)

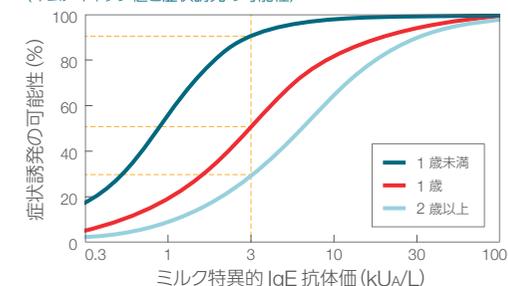
- 問診で摂取が確認できた食物は検査する必要ありません。
- ミルクは症状誘発の可能性10%程度(右図プロバビリティーカーブ)
- 卵白は症状誘発の可能性80%以上

表1に基づく医療機関の分類と役割

ミルク特異的IgEクラス2:  
① 一般の医療機関で少量OFCは実施可能  
オボムコイド特異的IgEクラス3:  
② 日常的に実施している医療機関に紹介すれば、少量OFCは可能(右図下)

### 【ミルク】プロバビリティーカーブ

(イムノキャップ値と症状誘発の可能性)<sup>1)</sup>



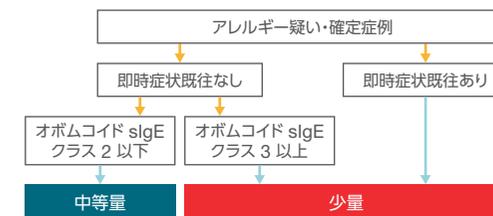
### 食物経口負荷試験実施医療機関の分類と役割

OFCを実施する医療機関を右表に分類します。自施設でOFCの実施が難しい症例は、近隣の医療機関と病診連携し、早期にOFCを実施できるように配慮し、**安易に除去を継続することは避けましょう。**

(食物経口負荷試験の手引き 2020「準備編」より抜粋)

表1 経口負荷試験を実施する医療機関の分類

	医療機関の分類	救急対応	実施可能なOFC(推奨)
① 一般の医療機関	食物アレルギーの診断を行っているが、OFCの経験は豊富ではない医療機関	救急対応が可能であり、必要時にはアドレナリン筋肉注射を行える	重篤な誘発症状のリスクが低いOFC
② 日常的に実施している医療機関	OFCの経験豊富な医師が在籍する医療機関	予期せぬ重篤な誘発症状に適切に対応できる	一部の重症例を除く食物アレルギー患者に対するOFC
③ 専門の医療機関	中心拠点病院およびOFCの経験豊富な医師が複数在籍する医療機関	予期せぬ重篤な誘発症状に適切に対応し、入院治療ができる	すべての重症度の食物アレルギー患者に対するOFC



総負荷量を選択するためのフローチャート<sup>1)</sup>  
(日常的に実施している医療機関で施行)

Find out more at [thermofisher.com/ann](https://thermofisher.com/ann)

© 2021 Thermo Fisher Scientific Inc. All rights reserved. All trademarks are the property of Thermo Fisher Scientific and its subsidiaries unless otherwise specified. Printed in Japan. 2112-ot-IC315-1

サーモフィッシャーダイアグノスティックス株式会社

〒108-0023 東京都港区芝浦4-2-8 住友不動産三田ツインビル東館

info-jp.idd@thermofisher.com